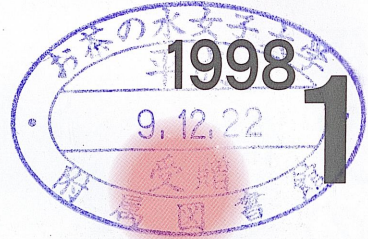


N24
97[1]

幼児の教育

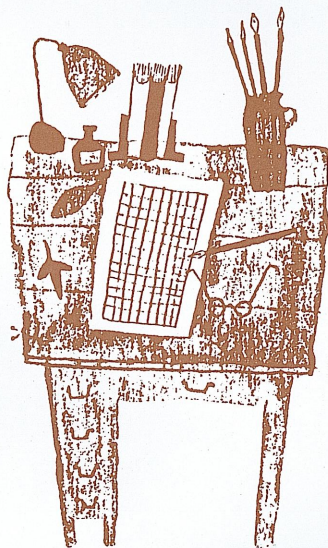
家庭-保育所-幼稚園



第97巻 第1号 日本幼稚園協会
附属図書館

倉橋惣三 保育へのロマン

荒井 洌・著



「倉橋は決して古くない」。日本保育界の巨人・倉橋惣三の思想・理論を現代保育の現場に生かす道を明らかにした注目の本。月刊誌「保育専科」に好評連載されたものを中心に書き下し部分を加え、明日の保育現場で使えるように、分かりやすく的確に倉橋理論を解説します。

A5判・220頁・定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第97卷 第1号



幼児の教育 目次
 — 第九十七卷 第一号 —

© 1998
 日本幼稚園協会

ある日……………(4)

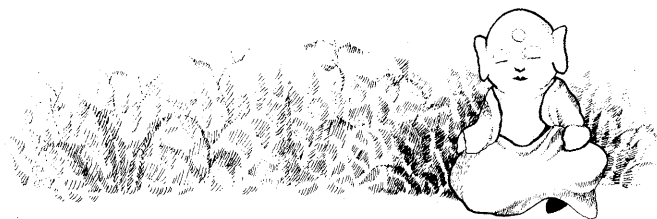
夢の日々(三) 目玉は一人一人の子どもの中に……………大多和 檀…(6)

「児童の世紀」を振り返る―その五―……………本田 和子…(10)

今、マレーシアでは……………小林 美実…(20)

「音と動き」の場から……………津守 真…(26)

子ども時代と私(10) 田圃の中の徘徊塾……………古市 憲一…(31)



子どものいる暮らし―男・夫・父

「とーたん」と呼ばれて―二人の子どもと暮らして―……………島田 聡……………(38)

滄桑の街・香港から(2) 滄桑……………今井 七重……………(43)

子どもの森幼児教室での保育……………内田 幸一……………(48)

子どもの本から 白銀は招くよ……………皆川美恵子……………(58)

ある日の育児日記から(85)……………佐藤 和代……………(63)

表紙絵／佐藤寛子

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「畑のちかく」

編集委員／田代 和美・伊集院理子・上坂元絵里

編集部／仲 明子



ある日

撮影・平野 清





夢の日々(三)

目玉は一人一人の 手足の中



大 多 和 檀

私は書くことが苦手です。ギリギリまで追いつめてやっと書く、という状態ですが、特に今回は、「夢の日々」に心が戻りません。と言うのも、園児募集の時期を迎え、「熱が出たら家から迎えに行くんでしょか」という質問を受け、現実はこちらまで来ているのか、とがく然としているからです。

これまでも「給食だといんですが」「バスは家の前まで来てほしい」「もう少し保育時間が長いと」「いろいろな物を作るのが大変」という話が出ていました。

○歳から二歳位までは手間暇かけて子どもを育てていたお母様方が、幼稚園に入る年頃になると急に、「お弁当作りは大変」「パスだと楽」という様になってしまうのか……。

私達の園に、十四年前にお母様方がまとめた、「幼児期家庭教育研究——幼児期における情緒、情操はどのように育まれるか——」という冊子があります。

この冊子の中で、「時にはお弁当
▼木の下で遊ぶ子どもたち
右手の大きな石の下は、川になっています。



を作るのは大変と思う時もありますが、朝、小さなおにぎりをにぎる時、幼稚園に行っている間だけできる幸せだな、いつも感じます」という文章を見つけました（・・・は大多和）。

「幸せ」というのは人によって違います。が少なくとも幼稚園児を持ってらっしゃるお母様が、手間暇かかることを、「今だからできる幸せ」と感じられていたら、そのお子さんは、本当に幸せですし、「夢の日々」を思い出し、出して持てることでしょう。

幼稚園時代のお子さんにしかできない例をあげたらきりがありません。

小さな石を宝物のように大事にできる、広告の紙で作った飛行機を自分も飛んだ気分で飛ばせる、小枝をじっと見つめていつも手にしている、泥のだんごをせっせと作る、将来の夢はセーラームーンになることと言い切れる、ふみちゃん、せいちゃんのように逃げたインコをどこまでも捜しにいける、さおちゃんのようにダンボールで作った鬼を靴先だけ出して家までかぶって帰る、などなど。

長い人生の中で考えたら、こんな時代は二度とありません。

「あとからふり返ったら、こんな夢の日々の中にいる子ども達に、手間暇かけられること、かわれることはなんと幸せなことでしょう」とお母様達に呼びかけたい気持ちで一杯になります。



もう一つ、こんな事も言われます。

「まこと幼稚園の目玉はなんですか」と。

「『まこと幼稚園の目玉はない』というのが目玉です」と応えています。

目玉は幼稚園にあるのではなく、一人一人の子どもの中にあります。

でも、そんな目玉は見えないからダメで、今は見える目玉を選ぶ時代なのだそうです。

それでも、私の夢は、まこと幼稚園を、子どもにとっても、大人にとっても、そこに行けばとりあえずはホッとでき、誰でもが自分らしく過ごせる所にする事です。

それも無理なく、ジワジワとそうなっていくことを……。

それこそ夢の話かもしれません。が、少なくとも、お弁当があり目玉がない幼稚園を選んだお母様のいるまこと幼稚園には可能性がある、と信じて、今日も子ども達を迎えています。

(まこと幼稚園)

「児童の世紀」を振り返る

その五

本田 和子



イデオロギーと「子ども」の遭遇

「立身出世主義」の場合

今世紀に発見された「童心」は、すかさずイデオロギーの標的ともされ、その時々为中心的イデオロギーによって存分に活用されている。しかも、その前向きで健

康な特性と、純粹で汚れなき特性の両者ともどもに……

たとえば、わが国の場合、明治近代は幕藩体制下の身分制度を解体することで、広く大衆のなかに上昇の心性を培養し、「立身出世主義」というイデオロギーを蔓延させた。そして、それが、すかさずターゲットに選び、

すばやく手を結んだ対象が思春期前後の若者たち、すなわち「少年」と呼ばれる人々だったのである。

というのは、「士農工商」という身分制度から解放された庶民の前に、新しい可能性として出現したのが「立身出世」であったし、しかもそれは、学制改革に基づく就学の勧めと結び付いて喧伝された。すなわち、勤勉に刻苦勉勵する者の前に立身の道は開けるのだ、と……。

したがって、「立身出世主義」は、「子ども」や「若者」と優れてかわりの深い社会的信念として、養育の行く手に高々と掲げられ、学ぶ者たちによっても、現実的な努力目標として選択されたのである。

近代文学研究家の前田愛は、『学問のすすめ』や『西国立志編』が、爆発的なベストセラーとなったことをこのことの証しと見る。さらに、少年たちの前に新たに創作されて提供される読み物類も、目標を目指して倦まず弛まず学ぶことを奨励し、その努力は必ず報われる筈とばかり、向日的な未来を指し示して見せた。たとえば、

小説家国木田独歩は、その著作『非凡なる凡人』において、『西国立志編』に導かれて人生を切り開いて行く没落士族の少年を描き出している。文豪幸田露伴の場合には、『西国立志編』に変えて、二宮尊徳の『報徳記』を選んだ。すなわち、『鉄三鍛』と題された少年向け小説のなかで、『報徳記』によって発奮し、貧困の果ての挫折から立ち直る主人公を造形したのである。『報徳記』とは、言うまでもなく二宮尊徳の伝記、明治の学校教育は、薪を背負って書物を読む二宮尊徳像を象徴に選んで、「学んで知を蓄えること」と「進めて業を成すこと」を少年たちの目標として心に刻印させたのである。

新しい時代が提供した「立身出世主義」は、これも新しい時代が要求している学校教育の普及運動と連動し、結果として、広く少年たちに共有されて彼らの向上意欲を煽った。その結果、上級学校に進学することが社会への登竜門として少年たちの前に立ち塞がり、そこから外れた者たちは、田山花袋の『田舎教師』に象徴されるよ

うに、早々と敗北者としての挫折を味わうこととなった。

上級の学校への進学と立身出世が、必ずしも緊密に連携し合っていて、それ以外の者たちに道が閉ざされていったという訳ではない。しかし、「末は博士か大臣か」という俗言が物語るように、「立身出世主義」というイデオロギーが、人々の目に学歴を肥大化して見せたことは疑うべくもなく、『田舎教師』の主人公はその肥大化した学歴幻想の犠牲者であった。

捕獲される「童心」

——大正自由主義とプロレタリア主義——

一九二〇年代の末に、プロレタリア主義もまた、子どもをターゲットとした闘争を開始する。直前に勃興した大正自由主義のうち、特に芸術的児童文学運動を反面教師として、労働者階層の子どもらのために革命の文学を提供すべく、プロレタリア童話を提唱したのであった。

プロレタリア主義の児童文化運動家は、『赤い鳥』に代表される芸術的児童文学の主張を、「芸術」という隠れみなのによって現実を隠蔽するブチブルのイデオロギーと批判し、子どもたちに現実の諸矛盾を認識させ、革命への意志を覚醒させることこそ子どもにかかわる諸運動の使命であるとした。子どもたちを、芸術などという麻薬によって眠らせるのではなく、しっかりと目を見開かせ、弱者が虐げられ貧しい者たちがより以上に搾取されている実情への怒りをかき立てるべきだと言う。

『赤い鳥』運動の指導者たる鈴木三重吉が、童心の躍動する童話・童謡の創作と提供を標榜し、そのために多くの作家たちを動員したことは周知であろう。それに賛同した一人、詩人の北原白秋が、童謡とは「童心童語の歌」であるとしてわらべうたを範としつつ、童謡史に一新紀元を画したこともよく知られている。

それに対して、プロレタリア主義者たちは、「童心」などという抽象的なものを根拠とすることを欺瞞的と非難

し、目の前の生きた子どもたちを対象とすべきだと主張する。「童心」などと自身の觀念に過ぎぬものに依拠することを止めて、生身の生活者たる子どもたちに、生身の現実を直視させねばならないとするのである。次に示すのは、この二つの立場から謳われた童謡であるが、いずれも「鳥」をテーマにしなが、両者の違いが如実に現れた作品として興味深い。

赤い鳥 小鳥 なぜなぜ赤い 赤い実を食べた

青い鳥 小鳥 なぜなぜ青い 青い実を食べた

白い鳥 小鳥 なぜなぜ白い 白い実を食べた

—北原白秋『赤い鳥 小鳥』—

ふくろは老いぼれ いくじなし

お山にかくれて 夜は鳴く

「ぼろ着て奉公」 おらイヤだ

つばめはハイカラ 燕尾服

「土喰で虫喰で 口渋い」

もんどり打っては 空でなく

にわとりや朝から 声高く

まっ紅な鶏冠を ふり立てて

蹴爪とぎとぎ 「米くれろう！」

—楨本楠郎『梟と燕と鶏』—

前者は、「赤い鳥はなぜ赤いか？」という問いに対して、「赤い実を食べたから」とあどけなく納得するであろう子どもの姿に、混じりつけなしの「童心」を見、それを、これまた飾りつけなしのシンプルな言葉で歌って見せる。後者は、そうした混じりつけなしの「童心」などありはしないだけでなく、それらをそのままに歌い上げるところに何の意味も見られないとばかり、むしろメッセーシ性を打ち出すことを狙いとする。この例で言えは、動物の動作や泣き声に換喩される役割に、そのメッセーシを託して、子どもらの闘争心を駆立てようと

するのである。

ところで、見るからに違いの目立つこの二つは、しかし、次のような意味では共通の徴に彩られているのではない。なぜなら、両者とも、子どもに託された自身の「子どもイメージ」を対象とし、それと自分たちの信念とを出会わせようとしているのだから。

大正デモクラシーの興隆と、安定期に入った資本主義経済市場は、独特の大正都市文化を展開させた。子どもらを巡って生じた自由教育と芸術運動は、そのエッセンスを蒸溜させた「大正じるしの子ども向け美酒」にも譬えられよう。したがって、そのターゲットとされた「童心」は、美酒に酔うに相応しく、健やかにして繊細、のびやかに解放された人間の理想型であった。

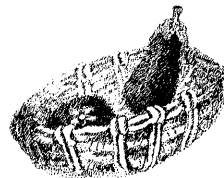
一方、近代化の諸矛盾に胚胎された無産主義は、昭和初期の経済不況によって革命への意志を先鋭化させつつ、労働階層を地盤とした反体制の戦列を固めようとしていた。それに加えて、近づく戦争への足音に危機感ほ

増幅される。子どもらをも巻き込んだ戦線の展開は、当事

者の総括によれば、革命闘争と平和運動の合体した姿とされている。労働者階級を子どもレベルまで結束させ、反体制ののろしを上げることで、

支配階層の暴走を食い止めることも可能ではないか。と、ばかりに、彼らが選択した「子ども」は、無邪気さに憩うにまして、逞しく合理的、戦いをも辞さぬ団結心に満ちあふれた働く者たちの希望の星であった。

したがって、そのいずれもが、それぞれの望むところをさながらに体现するものとして、子どももの純粹さに絶大の期待を寄せ、自身の抱くイデオロギー的信念の受け皿として、それを活用する。すなわち、それぞれの仕方子どももの「童心」を捜し出し、そこに次の時代を仮託



して未来の希望を夢みようとしているのだから。両者が共通の徴に彩られて見えるのは、この所以である。

ところでこの両者、果たしてどちらに軍配が上げられるのだろうか。子どもらの「心」なるものを射止めて、彼らを虜にし得たのはどちらの陣営だったのだろう。改めて振り返るとき、私どもは、次のような事実に気付かされざるを得ない。すなわち、勝負はいずれとも言い難く、どうやらイデオロギーの側の一人相撲に終わったのではなかったか、と……。

ファシズムと子どもらの大合唱

ファシズムは、「童心」の活用に巧みである。その健康な野生性の発揚体である側面に働きかけて、彼らを恐れを知らない勇敢な戦士に仕立て上げる。一方、「童心」が憧憬されるべき純粋性として理想化されるとき、それは、掲げられた目標、たとえば祖国のためになどという、崇高な目標への献身のために動員されることにな

る。

今世紀、世界各地に発生したファシズムが、子どもたちを「童心」の所有者と措定した上で、その両面を限りなく巧みに活用して見せたのは、このことの端的な証しと言えよう。とりわけ、わが国やヒットラーのドイツなど、全体主義的イデオロギーを国是として掲げた国々では、それらを学校や青少年団という組織体を通過させることで、彼らとの間に比類のない密月を発生させているではないか。

第二次大戦下のドイツにおいて、「ヒットラー・ユージェント」の名の下に結集した少女少女の群れは、ユダヤ人の摘発や彼らを匿う者たちの密告に関して、大人たちを越えて有能であった。総督賞欲しさに、肉親までも密告した少年の逸話もよく知られている。彼らは、まっさらな心で指導者の言を受け入れ、ためらいもなく繰り返ししていた。「汚辱にまみれたゲットトの民、ユダヤ人を追放せよ。わが国土から抹殺せよ」と……。そして、誇

らしげに叫ぶのだった、「ハイル・ヒットラー。栄光に満ちたわが祖国よ」と……。

わが国の場合も同様である。堅く巻いた日の丸の鉢巻きで決意のほどを表しつつ、少年少女たちは叫んでいた。「わが日本は神国なり」「鬼畜米英、撃ちてし止まん」と……。彼らのなかには、一九四四（昭和一九）年の満一七歳から兵籍編入を認めるといふ非常措置に応じて、少年飛行兵を志願し、戦場に命を落とした者さえもいた。彼らは、その幼い体に「祖国防衛」という美しいスローガンを刻印し、戦場に散った父や兄たちの跡を継ぐことを使命と信じて、毛ほどの疑いも抱かなかったのである。

勝ち抜く僕ら 小国民

天皇陛下のおんために 死ねと教えた父母の
赤い心を受け継いで 心に決死の白だすき

かけて勇んで 突撃だ！

—小国民戦時歌謡『勝ち抜く僕ら小国民』より—

大戦末期、「玉砕」という名の全滅のニュースが相次ぎ、戦局は日増しに不利と伝えられた当時も、密かに敗戦を予測する大人たちとは異なり、子どもたちはひたすら「神州（日本のこと）不滅」と信じ、自身の幼い命を捧げることでその予言を全うしようと望んでいた。先の歌を口ずさみ、木刀や竹槍を振り回しつつ、「日本必勝」を祈願していた子どもらの前に「敗北」という言葉は存在していなかったのだ。

中国における文化大革命時の紅衛兵の活躍は、いまだ、私どもの記憶に新しい。少年たちは、あるいは少女たちをも含めて、彼らはためらいもなく信じ、行動していた。「毛沢東主席と党首脳の命令に間違いはない」と……。紅衛兵のためらいもない摘発によって、専門家と

しての生命を断たれた者たちの証言は、当時の彼らの暴虐ぶりを伝えて聞く者を慄然とさせる。さらには、中近東、東欧、アフリカ等の各地に発生する民族紛争の渦中で、少年兵たちの活躍が示すのは、ファシズムと少年少女たちとの見事なまでのマッチングであろう。私どもは、この姿に脅威の念を抱かされると同時に、「無知」と「純粹さ」とが等価に見えることに戦慄を感じざるを得ない。

「洗脳」という用語がある。しかし、ファシズムが標的としたのは、「脳」であるにまして「心」ではなかったろうか。もし、造語を許されるなら「洗心」……。とかく合理性を欠いたファシズム・イデオロギーのターゲットは、ロゴスの府たる「脳」ではなく、バトスの居場所たる「心」、しかも、幼く混じりつけない子どもたちの心こそが、相応しいと言わねば可い。そして、今世紀後半の世界は、こうした「洗心」機能の対象として、子どもたちこそが最も相応しいと発見し、その

発見を濫用したのだった。

イデオロギー・学校・家庭

わが国近代化の歴史を振り返って、その時々々に勃興し世を支配したイデオロギーのうち、最も徹底して若年層を虜にしたのが、次の二つであることに気付かされよう。すなわち、明治の「立身出世主義」と、昭和の「皇国主義的ファシズム」がそれである。大正芸術主義が都市中産階級の父母や子どもをターゲットとし、プロレタリア主義の児童文化運動が、労働者階層の子弟を主たる対象としていたのに比して、先の二つは、広く全国の子どもたちの上を覆い、彼らを支配し彼らのなかに浸透していった。

この両者の成功は、言うまでもなく、それらが、学校教育と結託した点に求められる。しかも、わが国の場合、「不学の人の弘底」は近代化に不可欠の重点政策の一つとして、国是として推進された。教育の中心が、と

かく国公立に置かれがちだったのもこのことと無縁ではない。したがって、体制の選択したイデオロギーが、国公立の学校教育を支配下におくことには、何ほどの支障もありはしなかつたのだ。

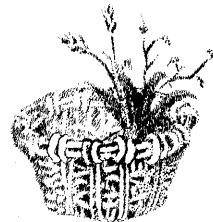
立身出世主義は、明治日本がモットーとした教育の振興と連動し、二宮尊徳に象徴されるように寸暇を惜しんで学業に励むことを奨励し、そのことによって栄達の道が開けることを暗示した。したがって、上昇を望む者たちは、学校教育を不可避の通路と考えて身を投じ、一方、学校は、彼らに忠実に努力することを勧めた。結果として、子どもたちは、学校制度という檻のなかにしつかりと囲い込まれ、そのなかで、自らの意志によって栄達のために勤勉に努力する道を選択する。あんなにも短期間に、義務教育の普及・徹底を見たのは、立身出世イデオロギーと学校教育との、こうした緊密な連携ブレイクの賜物と言うべきであろう。

第二次大戦下の皇国主義イデオロギーの場合も、同様

に、学校教育はその徹底に大きな役割を果たしている。国民学校令の制定により、義務教育を支配下においた時の権力は、

ためらいもない大胆さで幼い者たちの「洗心」に乗り出した。カリキュラ

ムや教科書の改訂、軍国主義的指導方針の徹底、さらには、雑誌や映画などの娯楽財の統制など、「洗心」のためのプログラムは放課後にまで及ぶ。もちろん、その後には、文部当局による情報管理網が綿密に張り巡らされていたことは言うまでもない。先に引いた子どもたちの歌など、その典型例と言い得る。当時は「小国民歌謡」などと銘打たれていたそれらは、煽情的な歌詞と悲壮なメロディによって彼らの心を捕らえた。子どもたちの全身が、頭のとっぺんから爪先まで、「お国のため」一色に



染め付けられたのは当然という他はない。

大正自由教育や芸術教育運動は、一部は学校教育に浸透し相互連携の動きも示したものの、そもそもから公立学校教育のアンチテーゼとして出発した経緯もあり、その飛翔の天地は、しばしば学校教育の外に求められがちであった。また、プロレタリア主義の教育文化活動は根底から反体制運動に他ならず、学校教育の外に拠点を設けて、独自のプロレタリア少年同盟的なものの組織化を志向している。結果として、この両者とも、広く子ども一般の心を捕まえるに至らず、特定の一部グループのみの信条として、ささやかな影響力しか持ち得なかったし、しかも短期間の消滅を余儀なくされている。わが国の場合、イデオロギーは、学校教育と結託した場合にのみ、広く子どもらと手を結び得るということを証しするかのよう……。

さらに、前回にも触れたが、今世紀は、市場原理が「子ども」あるいは「童心」をターゲットとすること

で、新しい局面を切り開くことに成功している。市場原理を、仮に「商業主義的イデオロギー」と呼ぶとすれば、それは、先ず教具・教材、教科書や文房具、あるいは学童服・運動靴など、「学校」を通路とすることで新地盤を形成し、その後、児童文学書や玩具・遊具、子ども服や子ども用生活用品と、「家庭」に焦点を合わせることで販路を拡張した。とすれば、イデオロギーと子どもの遭遇は、先ず「学校」に、次いで「家庭」に、媒介されることのみ可能となる。近代型「子ども」の発見は、「学校」と「家庭」の発見と連動するとされるが、イデオロギーが子どもとの関連で猛威を奮い得たのは、まさしく、この子ども史上に出現した「近代」の所以であった。

(聖学院大学)

今、マレーシアでは……

小林 美実

マレーシアの最北西の州ベルリスは、この国で最も小さい州である。人口わずか数万の州都カンガールは、どこにメインストリートがあるのかわからないぐらいの、田園風景のところどころに小さいビルや商店や住宅が点在しているといった静かな町である。

昨年八月十六日、十七日の二日間、この小さな

町でマレーシアの Community Development Division ministry of Rural Development (農村部の生活向上のための開発局。通称 KEMAS) 主催のワークショップが行われ、全国十四州から一〇〇人余の保育現場や養成所(職業訓練所)の教員をしている女性たちが集まった。内容は幼児のための人形劇で、私も所属している保育者集団による劇団

「ザ・ほっぴい」が指導の依頼を受けた。このワークショップの後、最近ペナンに次ぐ観光地として人気のでているランカウイ島で、KEMAS傘下の保育施設の子どもたち対象の公演、更にペナン近くの保育者養成施設（訓練校）でも、簡単なワークショップと公演を行った。

今、マレーシアは、首都クアラルンプールの東洋一の高層ビルや、南のシンガポールから北のタイのバンコクまでマレーシア半島を縦断するハイウェイ、各地の大工業団地の建設等でめざましい発展を遂げつつある国である。この国には二十二年前（一九七六年）から公演やワークショップで計七回訪れているが、初めの頃は、山羊やあひるがうろうろする狭い道路を馬力の無いバスに長時間ゆられて、それでもすばらしい南国の風景をゆったりした気分で見たり、時々バスを止めては路上の粗末な店で、豊富な珍しい果物を沢山買い込んで旅を続けたもの

だった。同行する現地の役人や教員も実にのんびりしていた。いつ目的地に到着するのか一向に無頓着。夕方到着すると思っていたのが、途中でエンジンがトラブルをおこしたりして、着いたのは午前三時。それでも宿舎の訓練校では、校長先生をはじめ、先生、学生、職員みんなが寝ずに待っていてにぎやかに出迎えてくれた。今もまだ日本からみれば自然や人々の素朴さは残っているが、変化は激しい。はじめの頃この国にくと、必ず聞いたことばに、「Look East」があった。日本のような繁栄、発展をめざせ、ということ。私たちにワークショップの依頼があったのも、その政策の一環だったと思う。

この国の問題の一つに、経済を握っている少数の中国系の人々に対して、大多数のマレー系の人々の貧しさがある。はじめてこの国で幼児や低学年児童対象の公演をした時、私たちはそのことに全く気付

かなかった。クアラルンプール市内の立派な施設の幼稚園や小学校を訪れ、一応の設備や子どもたちの礼儀良さに感心したものだ。そしてこれがこの国では普通のことのように案内された。

私たちがこの難しい問題をはっきり知ったのは、マレー系の青年たちの教育に携わっていた日本の青年海外協力隊員の青年に出会ったからである。当時、私たちは、夜間日本語学校に通う、車を持ち比較的裕福な、しかし大変熱心で努力家ぞろいの、主に中国系の勤労青年たちとも交流していた。この青年たちもマレーシアの次代を担う人々。しかしこの国には、もっと貧しく恵まれない人々がいることを知り、まずマレー系小学校の公演を受けることにした。はじめて訪れた農村の小学校のことは今でもはつきり覚えていて。その木造の粗末な平屋の校舎はゴム園のとなりであり、ゴムの木から採取したばかりの液を煮る異様な吐き気をもよおす臭いでいっ

ぱいだった。この臭いも、やがて狭い教室いっぱいに集まった子どもたちの熱気で忘れてしまった。とにかくすばらしい子どもたちだった。好奇心と嬉しさで輝く目、歓声をあげたり笑ったりするたびに光るまっ白な歯が印象的だった。こうした子どもらしい楽しみも少なく、半日の学校が唯一、外の世界と出会うチャンスなのだろう。演じられる人形劇（ことはのいらぬいショーや簡単な無言で演じられるドラマなど）の人形の動きや表情や音楽に全身で反応するその豊かな感性に感動した。制服の白いシャツや半ズボン、スカートはおそろいだが、汚れていて本当に粗末だった。しかしそんなことは全く気にならなかった。最後に子どもたちと手を取り合い、一緒にマレー語の歌を歌いあったのだった。当時公演した多くのマレー系小学校や幼稚園では、都市部の幼稚園のお行儀良さはなかったが、感情表現豊かな子どもたちであふれていた。



▲人形の頭づくりをするマレーシアの先生たち（受講生）

一九八一年の四回目の公演から、KEMASの正式な要請で研修を引き受けることになった。クアラルンプール、クアラトレンガヌ、ケバラバタス、マラッカ四箇所の訓練校では、全国の農村地帯から選ばれた若い女性たちが半年間ここで保育について学んでいた。例えばその間、外出は許されない。生活習慣、特に衛生面で良い習慣が身に付くまでは、故郷の生活に戻せない、ということだった。どの訓練所にも、食事の前の手洗い、排泄は便所で、病気の時は医者へ、など、私たちにとってしごくあたりまえのことが絵で説明されていた。太陽が照れば、庭で食器を並べ、日光消毒をする。保育の勉強といても、このような日常生活を向上させることから始めるのである。学生たちの宗教は全員イスラムである。肌を露出することはタブー。だから熱帯の暑さの中、常に長袖、ロングスカート、頭から深めにスカーフをかぶっている。何とも非活動的なス

マイル。当時は研修中は訓練校で学生たちと一緒にくらしした。だから時間はいっぱいあるのだが、いつも優先するのは、一日五回の礼拝と、午前午後の「Tea Time」。あと一針で人形が完成するというのに、時間になればボイと仕事をやめてしまう。その度、私たちはイライラした。しかしそのうち私たちもこのペースに慣れ、どうせ帰国すれば経済成長の社会で追いたてられる生活が待っているのだから、すこしのんびりしよう、という気分になった。

一九九一年までに計四回のワークショップを行った。たった十年の間に、訓練校の教員、各地の先生の指導の担当者のレベルは確実に上がった。動作も機敏になった。「Tea Time」といってもなかなか作業をやめない。夜中まで自習している。礼拝の時間だけは必ず守っているが。

今年のワークショップは初日に大きい公演をしたので、たった一日半の上、障害児を含む子どもたち



▲マレーシアの幼稚園。おやつの時間

への小さい公演が急にはいり、受講者たちのグループ別の発表が夜九時開始の真夜中にやっと終了という事になってしまった。人形劇の研修という事、日本でも人形を作ることが主になりがち。人形ができること、それでもうすべてできたような錯覚をしがちである。円形や楕円形の発泡スチロールをそのまま頭にした簡単な人形だが、幼い子どもたちのために短いドラマをつくり、動きを工夫し、ことばや音や音楽を選び付けることまで一応できたのも、今までの研修の積み重ねの結果と思う。毎回この研修に参加している者の多いグループは、さすがであった。私たちもその成果を喜びあった。

さて、この国でも新しい問題が起きている。環境破壊である。子どもが心身ともに健康に育つためには、ただ保育の現場や生活のレベルが上がれば良いのではないことを、私たちは日本の社会の現状で知っている。今回最もショックを受けたのは、今新

しいリゾート地になりつつあるランカウイ島でのこと。港、空港、ホテル、免税店、ヨットハーバーその他の建設がどんどんすすんでいる。地元の子どもたちにはほとんど無縁と思われるさまざまな種類のプールを中心とした巨大な遊園地も海岸に既に完成している。あちらこちらに、東南アジア特有の赤土が剥き出しになっている。これらが雨の度に海に流れ出し珊瑚礁や砂浜やマングローブの海岸が消えていくのだ。海岸の砂浜の一部では、美しく見える砂の下にヘドロがたまっていて、それに足をとられた者もいた。残念なことには、このような状態がこの国をはじめ、アジアのあちらこちらにみられる。

Look Eastで日本に学んで欲しかったものは何だったのか。

(宝仙学園短期大学)



「音と動き」の場から

津守 真

私はこの数年、毎週、障碍の大人の施設で「音と動き」の場をもっている。ウォルフガング・シュタンゲに教えられたことを基本にしている。体育館で音楽をかけて、好きなように動くことに終始するので、だれでも参加できる。音楽のテープやCDは、私があらかじめ選んでおいていくつかの中から参加者にひとつを選んでもらう。民族音楽や現代音楽が多いが、ときにクラシックやダンス曲もまぜる。どれがどれかは分からなくても、参加者が選択することが重要である。自分が選んだということに意味がある。このことはシュタンゲも強調するところだし、私もそう思う。音楽を聞きながらどのように動いてもよい。きまった型は一切ない。リーダーが相手を動かそうとしてはならない。どの人の内にもある創造的な動きを信頼することを前提として



いる。動きたくなければそれでもよい。ほとんど座ってだけいる場合もある。手も髪にもってゆくとか、足を一步前に踏み出すとか、何でもよい、自分からはじめた小さな動きを尊重する。その点は保育と同じである。

保育の実践に身をおいてきた私は、どこにいても私がかかわることによって相手が自由になる場をつくらないといられない。施設のような生活の場では、どんな責任感をもった職員に囲まれていても、食事、着替え、入浴、就寝など日常生活には、世話をする人の好みや習慣が伴う。個人が自分らしく活動できる場は別に設けることが必要になる。大人の施設では、造形や音と動きの場は、子どもの保育と同じような意味をもっている。

私はもう何年もここで「音と動き」の場をもってきたので、時間になると来て待っている人がきつという。二、三人のこともあれば、十数人のこともある。毎回約一時間半だが、いろいろのときがある。皆も私も満足して終わることが多いが、途中で私にあせりが生じて、曲を頻繁に変えたりことばかけが多くなったりすると、双方に不満足が残る。どこまでもゆっくりと相手に合わせてゆくことを心掛けねばならない。相手の身体の動きに合わせて私も身体を動かすが、身体の外見だけに合わせるのでは不十分で、相手の身体の動きの背後にあるその人の感じ方に心を向けることが重要である。そのことを忘れて身体だけを見ていると、何かが行き詰まってしまう。相手の気持ちを汲み取ろうとしながら動く、面白くて時間がじきに過ぎる。あるときは、



ほとんど歩くだけで終わることもある。あるときは、いつのまにか、数人が輪になって動くときもある。大体において、後半になると、それぞれに自分の動きがありながら、一緒に同じ空間にいるという共在感が生まれる。途中で音楽を止めて、皆で座っておしゃべりをしたり、歌を歌うこともある。ことばを話さない人が多いのだが、それだけに心の中ではいろいろと考えているので、しんみりとすることもある。先日、私自身が気持ちが悪くて、次々に音楽を変えたことがあった。私の動きも落ち着かなかつたに違いない。それでも表面的にはいつものように終わった。夕食のときに、ひとりの女性が、明日は音楽にゆかないと言う。そして実際翌日は来なかった。前日のその時間に不満足だったことは明らかだった。

いつも座っていることが多いひとりの若い女性に、あるとき、私は背中合わせに座ってみた。いつもは正面から笑いかけると手で私を追い払うのだが、背中を通して何かを通じ合った。そして立ち上がって私と背中合わせで踊った。お互いに楽しい時間だった。その次の日には十数人が参加して賑やかだった。私は背中を合わせる時間も余裕もなかった。彼女の行動は荒れていた。こんな小さな音と動きの場でも、ひとりひとりと気持ちを穏やかにして向き合うことの大切さを思わされた。

数週間後、男ばかり数人集まった。ひとりの男性は、この頃造形教室を気に入っていて、この日は久しぶりに体育館に来た。彼は来るなり私の手を引いて一段高い舞台に上がり、四角い空間を静かな音楽に合わせてゆっくりと歩いた。いつもは体育館全



体の空間を音楽とともに歩いてきたのが、この日は狭い舞台の四角い空間の縁に沿って歩き、私が下におりようとする、強く手を引いて舞台の上にとどまろうとする。舞台の縁にまで来て私が足を降ろすと、絶壁の縁に立ったかのようにぎりぎりの所で爪先で踏みとどまる。この限られた空間だけにいたいのは明らかだったので、私はしばらく舞台の上だけを一緒に歩いた。私の顔を見て本当にうれしそうに顔をほころばせるので、私まで心が楽しくなった。舞台の狭い空間は私だけと一緒にいるのを保証する空間だったのかもしれない。あるいは、この頃造形教室に入り浸っているこの男性は自分が抛り所とする場所を見つけたと私に知らせようとしたのかもかもしれない。ことばを話さないこの男性は、どんなことに会っても決して乱暴をすることも荒れることもなく我慢強い。通常の四十歳の男だったら怒ってしまったようなときにも、決して怒りを外に出さない。そして他人から言われたことに柔順である。もしも職場でこういう人が一緒にいたら、仕事は遅かったとしてもきつと尊敬されるに違いないと、私はこの人と手を組んで歩きながら考えた。私はときどき自分の感想を歩きながら話すのだが、このときもこんな話をする、彼はまた顔中を笑顔にした。

障碍をもつ人は、ことばを話さなくとも、手足が動かなくても、劣った人ではない。それぞれに周囲の動きを観察し、いろいろの感想をもっている。心の奥に憤りや悲しみをもっている、他人を責めることが少なく、おかれた状況を自分で受け入れ、一生懸命に生きようとしている。もっとこの人たちが社会に出ていったら、社会



全体に心が穏やかになるに違いない。

注

ウォルフガング・シュタンゲは、英国におけるクリエイティブ・ダンスの指導者である。そのワークショップにはかならず障碍をもつ人を交えている。日本でも毎年定期的にワークショップを開いている。次に引用するのは一九九六年サマーアートスクール、シンポジウムでの彼のことはである。「芸術は参加するものにとつてすべて平等です。だからこそ、障碍をもっているとかいえないということはまったく関係ないんですね。……障碍をもつ人たちが問題をもっているのではなくて、私たちが住んでいる社会のほうに問題があるのです。すべての人が健常者のようにならなくてはいけないと思うのは、私たちの押し付けでもあります。三十人であろうが、四十人であろうが、五十人であろうが、とにかくそこにいる人間のひとりひとりが個人なのです。そして、ひとりひとりに個性があつて、ひとりひとりに違いがあります。障碍をもつ人たちの場合、その違いが見て明らかになっているんですね」（ミュージズカンパニー発行）。

たんほ
田圃の中の徘徊塾
はいかいじゆく

古市 憲一

一、昭和十六年十二月八日

太平洋戦争勃発の日、私は七歳の子どもでした。

骨董品のラジオのガー、ザーッという雑音にま

じって、

『本、未明我が帝国陸海軍は東太平洋上に於いて戦

闘状態に入れり……』

という緊張感のある男性アナウンサーの声を登校直前の朝、聴いたことを今でもよく憶えています。

田圃地帯の真只中にある菅葺きの田舎家の古いながらも妙に磨き上げた板場（今でいうリビングルーム）の上で、小学校二年生の私は、

「何か大きなことが始まったのかな？」という胸さわぎを覚えながら聴いたことを思い出します。

戦争が終わったのが昭和二十年（一九四五年）の八月十五日。それ迄足かけ五年間、六年生になるまでずっと戦争中という時代背景の中で私は子ども時代を過ごしたことになります。

私には、妹が三人いました。

よく子守りをさせられました。子守りをしながら、島仕事の手伝い、水汲み、薪割りなどあれこれと父や母に指図されながらしたことを思い出します。

中でもお風呂の水汲み、風呂炊きは私に割り当てられた毎日の仕事でした。

私の田舎家は、稲作を主とした田畑の中に集落があるという土地柄、つまり見渡す限りの田圃たなぼの中、道添いに十数軒の農家が軒を並べているという典型

的な農村集落、その中の際立って古い萱葺きの大きな蔵屋敷がわが少年の家でした。

碁盤の目状に縦横に走る田舎道にそって巾二米程二メートルの小川が流れている美しい田舎でした。川の水が農業用水となり生活用水にもなっていました。

お風呂の水汲みはその小川の水を汲む仕事でした。屋敷の裏手側がその小川に直接、接しており屋敷の裏口の石段を何段か降りると川の水が直接汲めるようになっていました。

かなり大きなブリキのバケツで川の水を汲み上げては裏口の土間を通して風呂場の窓から風呂釜に注ぎ込む仕事、これが憲一少年の夕べの日課でした。

風呂場の窓が少年の身の丈程の高さにあるためバケツを、

「エイ!! ヤッ!!」

と気合もろとも、全力で持ち上げないと窓に届かず苦労したものです。

家添いにある小さな川には水藻が生い茂り、メダカや水すまし、鮎などの川魚が群遊するなどのどかさがあったよっていました。

当時はどの家も、汚水や下水を川の中に流さなかつたので川底まで透き通り川藻がゆらゆらと流れに身を任せるきれいな小川でした。

小学唱歌、「春の小川」に出てくる牧歌的な川そっくりの風情でした。

お風呂の水汲みはつらい日課でしたが、その川での鮎釣り、川海老捕りなどは少年にとっては日常的な楽しい遊びでした。

川の中にふわりと浮くように泳いでいる鮎の口のすぐそば迄、御飯粒をつけた釣り針を近づけると、パクリと御飯粒だけ食べて逃げる練達の鮎、逆に針ごと勢いよく呑み込んでくれる鮎など「鮎釣り」は楽しい遊びでした。

釣竿が屋敷裏の部屋窓からも出せるところが気



に入って、雨の日などは部屋の中からも鮒釣りを楽しんでました。

鶏の餌やり、これも幼き憲一少年の日課の一つでした。鶏は屋敷のはずれの畑の中に父が手製の小屋を建てて七、八羽飼っていました。

餌はきまって、大根の葉や「しいなとう（野草）」を小さく刻んだものと、蝗いんこでした。

蝗は稲田に行けば無数にとることのできる鶏にとっては貴重なたんばく源でした。

夕映えの中、黄金色こがねいろに光る稲穂のあちこちにとまる蝗の一匹二匹を素手で掴んでとる極めて初歩的、原始的な蝗とりでした。

とった蝗は竹筒の先から布袋の中に押し込む。その袋の中に百数十匹程たまったら、畔道を小走りに鶏小屋に直行したものです。

手のひらの中で捕えた蝗が逃げださんとはかりに



激しく動くすぐったいような感触は、今でも遠い日の思い出になっています。

小学校五年生の頃になると、飲み水汲みの仕事にそれに加わりました。

ブリキで作った二つの水桶けを天秤担ぎにして近くの村営の浄水場まで行き、帰りは肩に喰い込む痛さを我慢して片道十分の道のりを担いで帰るといいうのが仕事でした。小学生の私にはこれが一番つらい苦しい手伝いでした。

小川の水はそのままでは飲めないのです。どうしても

濾過した水が必要でした。一家の生命線を支えなくてはという気持ちがあつたからこそ二日に一度というこの重労働に耐えることができたのだと今もなつかしく思い出しています。

二、子どもざかりは遊びざかり

よく遊びました。

手伝いの合い間をぬって近所のメンバーと組んずほぐれつ。群雄割拠、きょうの味方は明日の敵、喧嘩もよくしました。

五寸釘の先を砥石で鋭利にした大小何本かの釘を持って、庭先の地面の上に突き立てては二、三人で陣取り合戦の遊び。

ジャラジャラとガラス玉（ビー玉）でポケットをふくらませて集まり地面においた相手の玉に、自分の玉を投げて当てたら相手の玉が我がものになると

いう「コッチン」というビー玉遊び。

武者絵などが印刷されている厚紙の札を蜜柑箱みかんの上に置き、手に持った同類の札を勢いよく叩きつけて置き札を裏返しにしたら我がものになる「パッチン」という遊び。

中でも、藁ぐるわらぐる（脱穀済みの稲藁を積み重ねたもの）を陣地にしたり陣取り遊びが白眉はくびでした。晩秋から初冬、肌寒い西風が吹く頃、藁ぐるのある田圃に出ての鬼ごっこに隠れんぼを併用したような走り回り遊びは敵味方入り乱れた、藁の中の決戦もあって人気のある遊びでした。

学校の帰り道、道添いに流れる小川に棲む水鳥（かいつぶり）を、棒切れと小石で追いまわして遊ぶ「追い詰め遊び」もよくやりました。五、六人の同輩共が川の兩岸に二手ふたてに別れて、水面を逃げまどう水鳥に石を投げ投げ棒を振り回して追い回す。

殆どの場合、水中深く潜水するため逃げられて戦果はないのだが、翌日また追い回すのを楽しみに服を水だらけにして遊びました。

こうした群狼の如き徘徊遊びで学びとった危険の予知能力とそれを避ける反射神経、突発的な変化にも素速く対処できる行動力、トラブルを収める調整力、チームワークをとることの重要性等はこうして大人になった私にとって今も大きな効用をもたらしているような気がします。

戦争が始まって戦争に終わった子ども時代、貧しくも不幸な時代であり、物不足、食糧不足でつらい厳しい時代でもありました。

田舎暮しであった為、直接戦禍には遭わなかったものの戦争の悲惨さは子ども心にもよく焼きついています。



毎日毎日、黒いうどんとかぼちゃ、時たま麦だらけの麦ごはんが馳走。フライパンで焼いた輪切りのさつまいもが最高のおやつという時代でした。

敗戦後五十二年、一部屋一台のTV、商品は街に溢れ、車の洪水に情報の氾濫、今の私たちはあまりにも豊かすぎる時代を生きています。

骨董品のようなラジオに耳を寄せてきいた「鐘の鳴る丘(ラジオドラマ)」の時代、釘やビー玉を遊び道具にした時代に戻りたいとは思いませんが、子どもざかりは遊びざかりであること、この原理だけ

は生かし続けていきたいものです。

子ども時代でなければ得ることのできない人生のパスポート、それが「遊びから得る生きる力」だと思うからです。

喧嘩して負けてもくじけず、トラブルが起きた時にもうまくまとめる力、チームワークをとるために独創的なグラウンドールをつくりみんなで守っていく能力などは、子ども時代に山野、路地裏の徘徊塾、遊び塾に何年も通ってはじめて手にすることのできる、素晴らしいパスポートだと思うのです。

どんなに机の上で本を読み参考書の問題を解いたにしても決して手にすることのできぬ大切なパスポートだと思うのです。

受験塾や進学塾に行かなくてもすむ時代を創ること。大切な人生のパスポートを得るための子ども同志の遊び塾を大きく世に出すためにも私たち大人は心に思い定めて、初等教育から大学教育に至る教育

の在り方、入学試験の在り方について徹底的な変革を断行していかなくてはならないと思います。

変えなくては変わらない。

改めなくては改まらない。

進めなくては進まない。

今進めている今世紀最後の教育改革こそは子ども時代でなければ手にすることのできないパスポートを発行し得る改革にしたいものです。

今や遠い思い出になった子ども時代、広い田園には爽やかな風が、今も吹いています。

(日本教育政策提言機構・夢塾主宰)

子どものいる暮らし——男・夫・父

「とーたん」と呼ばれて

——二人の子どもと暮らして——

島田 聡

我が家で、子どものいる暮らしが始まったのは、八年ほど前のことだ。現在、小学二年生になる長女が生まれたのが、その始まり。予定日を二週間も過ぎた正月の四日の事だった。そのお蔭で、僕は高校の同窓生との前々からの約束、正月

のスキーには参加出来ずじまい、僕の車をあてにしていた友人たちに車だけを貸すことになった。子どもはなにかにつけ、親を求める。思い返すと、生まれるほんの少し前から、長女はそうだったのかも知れない。子どものいる暮らしは結婚当

初、あるいは独身の時のように自由にはいかない。

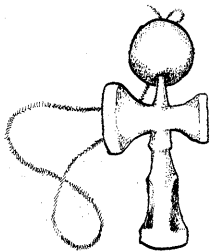
しかし、自由でなくなったからといって、それが即、デメリットでも無いことが、段々と感じられるようになった。忙しい時など、うるさくないといえはウソになるが、求められるということとは、とてもいいものだと感じるようになったからだ。

たどたどしく「とーたん、とーたん……」と何度呼ばれたことだろう。人はこんなにたくさん呼ばれ、あるいは求められる時代を、他に持ち得るだろうか。恋愛のさなかでさえ、あるいは「ロミオ」の名を呪文のように唱え続けたジュリエットでさえ、こんなには相手の名を呼ばなかっただろう。恐らく、子どものいる暮らしだけが、それを与えてくれるのだろうと思うと、何か、掛け替えない時間を与えられた様な思いがしたものだ。

さて、そんな我が家には現在、僕、そして妻、長女（小学二年）、長男（保育園三歳児）、今年二月誕生日定の次〇、の五人？が暮らしている。その具体的な暮らしぶりは……

朝六時半、朝食係の父起床、パソコンの電源を入れ、洗顔・一服、その後メールチェック。七時前、朝食の準備にかかる頃、長女か妻が活動開始、長男はたいいていグーグー小僧、最近は目覚めが良いが、悪いときは朝食に間に合えばいい方、起きて見たら、お母さんもお姉ちゃんもでかけた後……なんて事もままある。

まあ、たいいていは全員が揃って、朝食、ミルクティーにトースト（子どもたちは特



別にジャム付き)、野菜、ハムorソーセージ(子どもたちの好物はこれを切らした時の、ジャガイモのチーズ炒め)。しっかりと自分で着替えを終わった長女と、時にはパジャマのままの長男が席に着くと、朝刊を横目で眺める父と母を相手に、食事と賑やかなおしゃべりが始まる。

特に、最近いっぱしの事がしゃべれるようになった長男がうるさい(笑)。父と母が話している、割って入ろうとし、姉と両親が話している、大きな声で自己主張、堪えきれずに姉が注意すれば、「なんだよー」とボーイソプラノにドスを利かせてみたり……こんなうるさく、賑やかな食事だが、何かの理由で一人欠けるだけで、食卓は途端に火が消えたように淋しくなる。夕食も家族が揃うことの多い、我が家では、この感覚はひとしおだ。

技術としての甘えと笑顔を駆使する長男は、食



事が進まない時など、わがままが激しい。先日も地方ロケで父が不在の食卓で、怖い父がいないのを良いことに、これのひどいのをやらかしたそう。あまりのひどさに耐えかねた母親が、厳しく叱り、突き放すと大声で泣くは、片づけを命じられた食べかけの皿を運悪く落とすは、更に、その後始末を言いつけられると、うちのおもらしはするはで。最悪の事態に、長男の失態?の後始末をブリブリとする母の様子を察してか、優しい姉は、台所の床に散乱した、弟の皿の不始末を黙々と拭いてやっていたそう。

「けいくん（長男の名）、ちゃんと自分でやるんだよ」

「お姉ちゃん、今度はやってあげないからね」

ひとまず、事態が落ち着くと、長女は母親にこう問いかけたようだ。

「お母さん、けいくんのこと、きらい？」

「もう、ごはん作ってあげない？」

「そんなことないわよ」という母親の一言を胸に納めると、彼女はつぶやいたようだ。

「あー、お父さんがいればなあ……」

母親に五人目の家族ができて悪阻がひどかった時も、実質三人の生活はなかなかしんどかった。子どもたちもよく頑張ったと思う。友人の家族と約束していた旅行に、悪阻で具合の悪い母親が参加できず、父と三人で出かけた時もそうだった。姉弟、喧嘩をせずに仲良くしていようと、緊張気味の二人、弟の横暴に耐える姉の姿、ぎこちなく

友人の母親に甘える長男……「あーお母さんがいればなあ……」と父は思ったのだった。普段、家族が揃っていることが多い我が家では、誰にしても一人欠けると、淋しいだけでなく、何か起こると、うまくいかない事が多いようだ、余剰労働力がゼロというか、役割分担が出来てしまっているというか、四人で一組というか……。

そんな家族が、朝食を終えると、八時過ぎには長女、そして妻、と学校・職場へと出かけて行く。僕に早立ちの仕事が無いときには、保育園に出かけるまでの小一時間、残された男組は、それぞれの趣味に没頭したり、一緒に遊んだりして時を過ごす。保育園で長男と別れると、家族が揃うのは夕方だ。一足先に帰るようになっている僕が、五時過ぎに、学童クラブから帰宅する長女を迎えると、米を研いでから、保育園へと長男のお迎えに出発、留守番をする長女のもとに母親が帰

宅し、あわただしく夕食の準備にかかる頃、父と長男が保育園から戻る。そして、例の長男が原因のトラブルの種を抱えつつ、賑やかな夕食のひとつが始まる。我れ先にと、学校、保育園での出来事を話そうとする子どもたちの姿に、小さなうちが花なんだろうなあ、という思いも過ぎりながら、それぞれのトビックスがあれば、夫と妻も互いに報告をしたり、と、それを良く思わぬ（笑）長男の声が大きくなる。

夕食後は、やっと多少ゆったりとした時が流れる。それぞれが思い思いの楽しみに耽れることも、家族揃ってゲームや工作をすることも、姉弟で遊ぶことも（最近はブロックやミニカーなどを並べ、箱庭的世界を作るのが流行っている）……。

そして、母親と子どもたちが一緒に入浴。父が寝床の準備を終える頃、子どもたちが先に風呂から上がり、姉は独りで、弟は父に手伝ってもらいパ

ジャマに着替え、歯磨き。そして、九時を回っていなければ、絵本や物語を読んでもらう、寝る前の最後の楽しみ？義務？を分かち合う。母親が寝室に入り、小声のおしゃべりが、いつしか寢息に変わる頃、ささやかな子どもたちとの一日が終わる。

考えてみると、これだけ家族一緒に過ごせる日があったとしても、眠っている約十時間ほどを除くと、家族が一緒にいるのは、朝の一時間ほど、夕方からの四時間ほどの併せて五時間ほどだ。両親との結びつき・依存が強く、家族が揃う幸福感のある、幼いうちだからこそと思うが、家族で一緒に過ごす、こういう時間を大切にしたいと思う、今日この頃であります。

（写真家）


滄桑の街・香港から②

滄 桑

海の青さを表す「滄」と桑畑の「桑」の二つの文字を合わせると「滄桑」。これは、「世の中の移り変わりが激しい」を一言で表現している言葉です。「海が変じて桑田になる」という劇的变化は、ここ香港においては、キーワードです。ほそほそと漁業しかすることのなかった香港が、世界有数な国際・経済都市になりました。しかし、その陰には、中国の混乱、日本の侵略といった世

今井 七重

の動乱があり、昨年の歴史的香港返還等の懸念材料を常にかかえ変化を続けています。幸せそうにみえる陰に常に不安材料をかかえ、それでもそれに立ち向かい、自分と家族の幸せを勝ち取るうとしている個人々の、人生そのものも又、「滄桑」といえます。この連載を始めるにあたり、この言葉をタイトルの一部に選びました。

移り変わりが激しいと言えば、香港の天気の変化には、驚かされます。天気予報に雨・晴れ・曇りマークが同時に表示されるのは、日常です。九月に入ると比較的落ち着きますが、四月から八月は特にその傾向が強いといえます。子どもの学校案内の最終ページには、台風・豪雨警報発令時の対策という項目があり、それによると、豪雨の時には、テレビに大雨マーク  が表示され、雲の色は次の四種類です。

緑色——大雨注意報ですが、休校にはなりません。


黄色——休校ではありませんが、天候の悪化により赤に変わる可能性がありますのでテレビ等の情報に注意し
て下さい。

赤色——臨時休校になります、既に登校の時は、安全を確保し下校させます。

黒色——臨時休校になります。

ちなみに、この黒の場合は、勤め人にも適用されるため、出社してはならず、既に会社にいる場合には、黒色が解除されるまで、その場所を離れてはいけないことに

なっています。

日本の台風時・交通スト時同様、大切な情報であるもののそれを必要とする時は、ほとんどないだろうとたかをくくっていたのですが、一学期中、子どもたちは赤雲マークのため、五回ほど臨時休校になりました。どのチャンネルでもテレビの画面右下に  マークが表示されていました。我が家のアパートからは、啓徳空港の離着陸が、その向こうには九龍半島側の林立するアパート群が良く見えるのですが、ひとたび雨が降ると、もやがかかり、十メートル先も見えなくなります。しとしと降るといふ表現は、ないに等しく、降るとなるとスコールのようなどしゃ降り、窓ガラスをたたきつける雨音の激しさと、アパート玄関前のくんだり坂をまるで滝のように流れる雨には恐怖すら覚えます。雷もびかっと光ったかと思うと、間髪入れず、ゴロゴロドシン。ピカッ、ドシン、ピカッ、ドシンとあわただしくすさまじいものです。

しかし、このお天気も、信じられないぐらいのスピー

ドで回復します。朝、六時前、「テレビに赤雲マークが表示されましたので、今日は臨時休校です」の連絡網で「今日一日なにをして過ごそうかしら」と思っている。雨がいきなり止み、青空がのぞきはじめ、滝のように流れていた玄関前の道路は、その跡形も残さず、乾きはじめます。そして九時には、なんと快晴状態になります。「今からでも学校にいつてくれないかしら」と体力を持って余し気味の子どもを見て、ため息をつきますが、

「スクールの都合がつかない」ことや「学校に行くまでの交通渋滞及びがけ崩れが予想される」ため、一度休校になると、親子共々天気もまた滄桑の香港を恨めしく思いながら、家で（時には、プールにいったりして）一日を過ごす事になります。

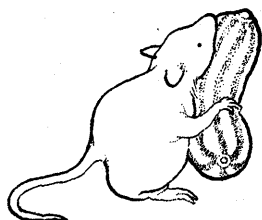
反対に、今まで快晴だったのに、突然降り出した大雨で全身ずぶぬれになるといふ事もありました。徐々に雨足が強くなるというより、いきなり豪雨です。たかだか五メートルの距離でも傘無しでいくには、かなりの覚悟をせまられます。仮に傘をさしていても横殴りの雨で、

かなり濡れてしまいます。よく、ビルの軒下で傘を手にしていても、雨宿りをしている人を見掛けますが、気持ちばかりです。でかける時は、天気予報を見るようにしていますが、このような激変に対する自衛策は常に折り畳み傘をバッグにいられておくことです。

しかし、意外な事に子どもたちは、スクールのバスが学校のひさしのある場所にとまりますし、スクールバストップまでは、親が傘をもって送迎にできますので、雨具とは無縁です。

駐在の日本人は、余暇を利用してテニスに励んでいる方が多いのですが、予約時間の二時間前に雨が降っていても、「まだ、

中止かどうかわからないわ。一時間前に決定しましょう」という感じですよ。なんだか、予定がたらず、天気から、香港全



体にまで、嫌悪感を抱きそうになる事もありましたが、ぎりぎりまで、諦めない姿勢が身についたと、いいように解釈するようになりました。

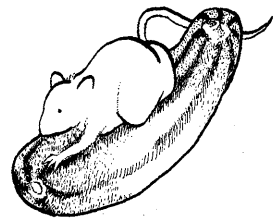
人の出入りが多いのも、海外の特徴と言えます。子どもたちの小学校では、この夏に二十名近くの生徒が日本もしくは、新たな転任地に向け香港を離れましたが、二学期には、又同人数の転入生を迎えました。

さて、こんな状況の中での役員選出について触れてみたいと思います。役員選出については、日本でも色々問題を提起しているようですが、香港日本人学校タイポ校の選出方法は、かなり興味深いものがあります。クラス役員二名、移動が多い場所柄、補欠六名を選出します。役員選出の招集日の十日前迄に、役員免除項目、考慮項目のどれに該当するかを申告する書類が担任を通じて配られます。役員免除項目には、過去二年間に常任委員及びその上の実行委員経験者、過去二年間にバス委員（スクールバス関係のお世話をする人で、この仕事もかなりの負担といわれています）正・副委員長経験者、教

職員の家族、未就園児のいる人、現在妊娠中の人が対象になります。考慮項目では、過去に常任委員を経験された人が一番に考慮され、順に、過去にバス利用者会の幹事を

経験された人、前年の十月以降に常任委員を経験された人（転勤等で途中から、役員になる人がいるためです）、今年の二月一日以降に来港された人、未就学児のいる人となっています。ちなみに、私は、四月一日来港ですので、優先順位下から二番目の考慮項目に該当しました。

役員選出当日は、各クラスごとに集まり、上部の役員経験者の司会進行のもと、敵かに幕が切られます。出席者の確認、委任状提出者、無断欠席者の名前を読み上げた後、お決まり通り、立候補者を募りますが、当然、いません。続いて、免除項目該当者が立ち、名前及び免除



内容を述べます。それが、終了すると、免除項目対象全員が立ち、椅子とりゲームが始まります。考慮項目一番から順に該当者が名前を言って、椅子に座っていきま
す。だんだんと立っている人が少なくなり、八名になつた段階で、今年の役員が決定です。かりに考慮項目に該当していても、八名に入れば、役員になってしまいま
す。

私の場合、まだ十名近く立っていたので、考慮項目が尊重され、ぎりぎり椅子に座る事ができましたが、未就学児のいるお母さんたちは、私より、考慮項目優先順位が低いため、役員補欠になりました。仕事を持っている、幼稚園の役員をやっているというのは、考慮項目にも該当しません。しかし、今回、お仕事がハードで休めない、手術後なので無理、日本語が不自由という理由で辞退したいという人が数名いて、彼女らは、前記の手順で立っている人が少なくなった時に、自分の立場をまだ椅子に座っていない人たちに訴えました。幸いその全員が了承したため、受け入れられました。今回、かろうじ

て椅子に座われた私ですが、来年は、何も考慮項目がないので、覚悟しています。

上の娘の日本での学校の役員は、有無をいわせず、出席番号順にまわってきました。とても合理的な方法だと気に入っていましたが、香港での役員選出も、海外にいることをあらためて感じさせ、納得のいく体験でした。

色々な意味で、滄桑がキーワードの香港。これからもそんな部分を感じていきたいと思っています。

(元幼稚園児の母・香港在住)

子どもの森幼児教室での保育

内田 幸一

新しい試み

一九八三年、私たちにとっても新しい幼児教育のスタートでした。長野県は長野市の郊外標高一〇〇〇メートルの高原、飯綱高原に小さな山の幼稚園を作ろうとしたのです。周辺の環境は森や林、大小の池が散

在し四季折々の花が咲き、小鳥たちが飛び交う自然の豊かなところです。そんな自然を満喫できるところに子どもたちの生活の場を作るために、私たちは東京での生活を切り上げこの地に移ってきました。

十五年近い月日がたった現在は、園児数六十名の自然体験型の幼稚園が出来上がりました。子どもの森幼

児教室は私設の幼児教育の場であることは今も変わりませんが、これまでの幼児教育の概念にとらわれることなく、自由な発想で子どもたちとの活動や保育環境を作ってきました。私たちが自然の中で生活することにあこがれていたこともあり、子どもと自然とのつながりは希薄になり、幼児教育のなかでは大切だとされながらも、保育活動をはじめ生活自体が人工的な環境や関係の中だけで行われることに、大きな危機感を感じていました。このままでは、子どもの成長に影響するようなことが将来起きてくるだろうと考えたのでした。

子どもの森での保育活動は、幼児にとって自然との関係がどのようにもたれたらいいのか模索の連続でした。幼児にとって自然は敵しすぎるものもあれば、冒險的な活動が出来る場でもありました。自主性や自立心を育て、子どもらしい自由で柔軟な発想を大切にしながら、自然と子どもとを結び付ける保育環境作りを

目指してきました。それでは、具体的にどんな活動が行われているのかお話ししていきますよ。

子どもの森幼児教室は、三歳から五歳までの子どもたちがたて割りになっています。年齢別のクラス編成はありません。保育者は十人ぐらいの子どもに対して一名の人員が配置されています。活動の内容により同年齢の子どもも集団になったり、たて割りの小集団になったり、様々なグループが保育の内容に応じて作られます。保育者には女性も男性もいて複数の保育者が関わるチーム保育が行われています。

保育施設や遊具、おもちゃなどは手づくりされます。子どもたちの動きや遊びの様子から色々なヒントを得て、子どもたちの遊びや動きが発展するような環境が作られていきます。園庭には木登りネットやロープの振り子、吊り橋、ネット登り、渡り棒、隠れ家の小屋、土手登りの急斜面、泥んこ遊びの広場、池、草むらや雑草広場などが用意されています。

季節折々に散歩や森の中に出かけます。河原遊び、川での水遊び、山菜採り、茸狩り、木の実拾い、落ち葉拾い、森の中の探検、お花を見に行ったり、ハイキングや山登り、歩くスキーでの雪の林の散策など自然の中に出る目的は様々ですが、そうした機会をたくさん設けています。自然の中での活動は次の活動へつなげられます。集めてきた木の実や落ち葉、枝などを製作の材料として飾りや置物などを作り、家族へのプレゼントにするなどします。山菜や茸は調理の材料として、子どもたちの手で料理され自分たちでつくる給食になります。森での遊びが動物や植物などのテーマのお話につながったり、忍者やてんぐ、森の妖精や動物たちが登場するオペレッタなどお話や音楽による表現活動につながっていきます。

大地からの恵み

春には野菜の苗や種まきが行われます。子ども森



▲力を合わせて堆肥運び

幼児教室には五十坪ほどの畑があります。堆肥を子どもたちと共に畑に入れ、土づくりが行われます。耕した畑にはなすやトマトぎゅうりなどの苗が植えられます。じゃがいもの種芋も毎年たくさん植えられます。インゲンや枝豆やかぼちゃなども、苗づくりのためのポットの中に種まかれます。

これらの野菜は、夏休みが終わる九月には収穫できます。

六月には田植えが行われます。子どものある飯綱高原は、標高が高いのでお米をつく



▲田植えの苗を手にして

ることはできません。そこで、車で三十分ほどはなれた三水村に田んぼを借りて、田植えを経験させてもらいます。子どもたちの力で植えるのに丁度いい六十坪ほどの田んぼです。田植えには泥んこになっていいように、泥遊び専用の半ズボン（通称泥んこパンツ）をはいて行きます。全身泥だらけになっての田植え、田んぼの中に入りながら小さい子もいますが、畔から他の子の様子をしっかりと見ているようです。次の年には、そんな子もしっかりお百姓さんになりきっています。田植えの汚れを、運んできたお湯のタンクから仮設のシャワーで一応落とした後、畔道でお弁当をいただきます。お弁当もそこそこに蛙採りに走り回る子、用水路に入って水遊びを楽しむ子、田んぼのまわりでも遊ぶことには事欠きません。この後近くの温泉へ行って露天風呂に入ります。そこですっかり田んぼでの汚れをおとしてさっぱりしたところで家に帰ります。そして、秋には野

菜の収穫や稲刈りが待っています、収穫した野菜やお米で野外料理が行われたり、レストランが開かれたりします。冬にはお餅つき、これも子どもたちの収穫した餅米で行われます。自分たちが作った作物ですから、まるで好き嫌いなどなかったように良く食べてくれます。

自然がぼくらの保育室

七月は高原の自然の中で、親子参加の野原運動会が開かれます。子どもたちと共に家族で、自然の中で過ごす楽しさを知ってもらいます。子どもたちの生き生きした姿を目にすることで、自然の中で子どもたちが育っていることを感じてもらえることでしょう。そして、子どもたちの生活に、自然の中での遊びが大きく影響していることを感じとってくれることでしょう。この運動会でも比較的やさしいオペレッタが演じられます。衣装をつけ、それぞれの役になりきって踊る子



▲足踏み脱穀機はすごい機械です。人の動力で効率良く働いてくれます。

どもたちの姿を見ることができません。

夏休みに入ると年長児と年中児を対象にしたお泊り

保育が行われます。普段とはいくぶん違った、夏休みの楽しい林間学校といった趣でプログラムが用意されています。養魚場で虹鱒のつかみ取りをし、虹鱒の塩焼きと飯盒炊きで自分たちの夕食を作ります。夜は花火やキャンプファイヤー、螢を見に夜の散歩に出かけたり、お泊りならではの活動がいっぱいです。湖で遊覧船に乗ったり、カヌーや筏を浮かべての水遊びもあります。二泊三日の日程が、それこそあつという間に過ぎてしまいます。お泊り保育が終わると一か月ほどの夏休みです。夏休み明けには親子で登る飯綱登山が待っています。標高一九六〇メートル余りの飯綱山の頂上を目指して、往復六時間のチャレンジです。子どもたちの足取りは軽快ですが、最近運動不足ぎみのお父さんにはきつい登りになりそうです。

秋の深まりの中で

十月、いよいよ稲刈りの時期をむかえます。稲刈り

は好天の日が選ばれ、年長児が始めに鎌を持ち田んぼに入ります、一束一束刈られた稲は、大人の手により、ハゼに掛けられるように結束されます。田んぼのあちこちから、結束された稲束を集める仕事は年中児や年少児の仕事です。やがて鎌を使った稲刈りも、年中児や年少児にも順番が回ってきます。慣れない手つきで、先生に手を添えてもらう子もいます。それでもいつの間にか、サクサクといい音をさせて稲を刈る子も出てくるほどです。刈り取った稲束は、幼児教室の庭でハゼ掛けされて天日で乾燥します。十日ほど乾燥させたあと今度は、昭和三十年頃までは良く使われていた足踏み脱穀機をつかったの脱穀作業です。乾燥した稲束を脱穀機にかけると扱が勢い良く飛び散りまゝです。子どもたちの表情は、藁束が脱穀機にからみこまないようにと真剣そのものです。脱穀機の前では、ふざけた気持ちではいられないことを良く分かっているようです。

十一月に入ると、いつも見上げていた飯綱山の頂上付近が、白くなりはじめます。子ども森幼児教室の庭にも、霜が降りる日が多くなります。日中の暖かさで霜が解け、庭の斜面はとても滑りやすくなります。思うように、庭を走りまわって遊べない季節になります。それでも、泥んこ斜面をプラスチック製のソリですべって遊ぶ、わんぱく連中もいます。早朝の冷え込みで、五センチほどの霜柱が出来ること、あります。盛り上がった地面を踏みしめると、あたり一面に氷の針が散らばりきらきらと輝きます。霜柱を家に持って帰ろうと、ビニール袋に詰める子もいます。しかし、帰る頃にはただの泥水が、ビニール袋の中には残っているありさまで。十一月のこの頃から、オペレッタの活動が始まります。先生たちが色々な役に扮して、オペレッタを演じてくれます。話のストーリーが子どもたちに伝わります。毎日少しずつ、自分の踊りたい役の踊りを踊っているうちに、いつの間にか全



▲舞台上でオペレッタを踊る子どもたち、役になり切って力一杯踊ります。

部の歌と踊りを覚えてしまいます。一か月間ぐらい、そんなオペレッタの活動が、つづき自分のやりたい役がはつきりした頃、舞台でお家の方々を呼んでの発表会をします。

白銀の世界に招かれて

冬休みが明けた一月、子どもの森幼児教室の周辺は、一面の雪の世界におおわれます。一メートルほどの新雪が、園庭をまるで違う世界へ変身させます。木々は雪化粧をし日の光を受けてキラキラした光の粉を降らせます。斜面という斜面はソリの格好のゲレンデになります。色鮮やかなソリを滑らせては、雪煙をまい舞い上がらせる子どもたち、斜面を何度となく登りまた滑り降りる。これからの三か月は、そんな雪の世界での生活がつづきます。

年長児は近くの飯綱スキー場へ、ゲレンデスキーに出かけます。スキーブーツにヘルメット、ゴーグルま

るで一人前のスキー選手の出で立ちで、みんなやる気充分です。スキーのレベルごとにグループに分かれて準備運動をすませると、さっそくリフト乗り場へ、元氣グループはもうすでにスキーが滑れる子どもたち、リフト乗り場への登り斜面もスキーをつけたまま難なく登ってしまいます。リフト乗り場のおじさんにも励まされて、洋々とリフトに乗り込みます。がんばりグループはスキーを始めて間もない子たちのグループです。先生とひとりひとりがベアでリフトに乗り、一緒に滑ります。全員が一度には行けないので、そのほかの子は緩い斜面で滑る練習をします。滑る練習と止まる練習、そして斜面を登る練習を何度も繰り返します。

二月に入り降り積もった雪が、その重みで固くなりはじめます。子どもの森幼児教室の裏には、畔の木が生える湿原があります。雪の無い時期には、踏み込むことのできない湿原も、雪におおわれてしまう時期に

はクロスカントリースキーの良いコースになります。コースには目印の標識が、木々の枝などに付けられています。目印を追いながら、雪の林の中を進みます。兎の足跡やリスの姿を見ることもあります。動物たちの生活の様子を想像したり、飛び交う鳥たちの鳴き声に耳を傾けたり、林の中のスキーはのんびりとした雰囲気を味わうことができます。目印を追いながら行くと、コースを一周してもとの場所に戻ってくる間にか戻っています。このコースには、年少児も年中児も気楽に入ることができます。クロスカントリースキーの扱いを、誰に教えられるということもなく、雪野原を歩いているうちにリズムカルな動きを、自分から会得してしまう子どもたちです。

子どもの森の庭に雪の像やカマクラ、トンネルなどが出来上がります。そんな雪の像や雪の上に、絵の具で色を付けたり、絵を描いたり、白一面の世界に淡い色の世界が現われます。ピンクや黄色の雪ダルマ、青

い怪獣や緑の色に塗られたカマクラの室内、子どもたちのいたずらお絵描き、存分に楽しむことができます。色のついた雪の上に新しい雪が積もり、何度となく繰り返された後にはカラフルな雪の層が出来上がります。雪の斜面を掘っているとそんな場所に出くわします。まるで宝石の鉱脈でも見つけたように、子どもたちは大喜びで宝石掘りに興じます。大きな塊を掘り出そうと、我先にとシャベルをふるいます。

飯綱高原が最も冬らしい様子を見せる頃、冬のお泊り保育が行われます。深々と静寂の中で雪の降る音だけが聞こえる夜、幻想的な雪の世界を見せる森の木立、新雪の中を進むクロスカントリースキー、冬の厳しさの終焉を告げる雪解けの微かな流れの音、あふれる光に満ちた大斜面のソリ遊び、新雪の中を駆け回り歓声を上げる子どもたち、自然に抱かれて生きる子どもたちの姿がそこにあります。



▲タイヤチューブで斜面を滑る。
ソリでは味わえない豪快な乗り心地！

三月まもなく卒園

節分、ひな祭と春を迎える行事も過ぎる頃、年長児は創作劇の準備に入っています。物語をつくり、舞台作り、衣装や小道具を作ります。卒園を前にお別れ会で披露する劇の練習です。子どもの森での思い出や出来事を歌詞にして、思い出のアルバムのオリジナル曲が作られます。卒園の日がだんだんに近づいてきます。卒園証書にそれぞれの子に於てた詩を書きます。子どもの森で過ごした数百日が、いつまでも小さな宝物として心のどこかにしまわれていることを願って。

(飯綱高原・子どもの森幼児教室主宰)



子どもの本から

白銀は招くよ

皆川美恵子

エルサ・ベスコフの描く愛くるしい子ども、その子どもが、白い雪の中を赤い毛糸帽をかぶり、スキーを滑っている表紙絵を見るなり、ドキドキして魔法にかけられたように絵本に吸い寄せられてしまう。静かに穏やかに晴れわたった完璧なスキー日和が、まるでその場の透きとおった空気までを伝える

かのように描き出されている。青空が広がり、幻想的な白い世界が限りなく続き、妖精のような子どもが頬を赤らめスキーに興じている。静謐そのものだが、シユプールの描かれていく足もとからは、まるで音が聞こえてきそうで、スキー好きには抱きしめたくなるような珠玉の絵本なのである。

北欧スウェーデンの冬と春の季節は、絵本の中で、冬王の支配する男性的な宇宙と、春の女王が光臨する女性的な宇宙とで明解に組み立てられている。雪の降る冬は、スキー、そり、そしてスケートで遊ぶ元気な男の子ウツレにとっては、早く到来し、いつまでも続いてほしい好ましい季節なのである。冬生れのウツレは、六歳の誕生日に本物の新しいスキーを父親から贈られる。ウツレは雪が降るのを心待ちにするが、なかなか降らず、やっとクリスマスの日、三週間前から雪が舞い始める。そして二日二晩降り続いた次の日、冬晴れの青空となる。ウツレは、新しいスキーをはいって白い森の中へ一人で滑ってゆき、魔法の森のような美しさに、思わず「ありがとう、親切な冬王さま。とうとうやってきてくださいましたね」と叫び、森に挨拶をする。すると八白霜しいさん▽が登場して、△冬王▽の住む城まで案内されるというストーリーが展開されてゆく。

冬王の城には、妖精のように小さなラップランドのおじいさん、おばあさん、そして子どもたちが、スキーやスキー靴、スケートやそりを作ったり、靴下や手袋を編んでいる。スウェーデン中の子どもに

◀ 『ウツレと冬の森』エルサ・ベスコフ作・絵
小野寺百合子訳 らくだ出版 一九八一年



贈るため、クリスマスに向かって仕事の真最中なのである。森から帰ったウツレは、クリスマスの朝、ウツレへはスケート、弟へはそりが届けられ、冬王からの贈物が、白霜じいさんによってなされたことを確信する。

サンタクロース像も見えかくれする冬王だが、この冬王の住む城、冬の森への《行きて帰りし》物語に、さらには春の季節を告げる八雪どけばあさん▽そして八春の女王▽が配置されているのは、多目に注目される。雪どけばあさんは、春の女王のために箒で雪を掃いて雪を溶かしていくおばあさんで、白霜じいさんからは蛇蝎のように忌み嫌われている。季節をわきまえず、冬の最中に雪を取り除き、雨と泥で白銀の世界を台無しにするという理由からである。ウツレは、白霜じいさんになつており、雪どけばあさんに腹を立てていた。しかし、春の女王が蝶の羽ばたく車に乗って到来すると、雪を溶かす仕事を終え、ま新しいエプロンをかけたおばあさん

が、にこやかに女王を迎える姿を見ることによつて、おばあさんにも親しみを感じてゆく。

このように物語には、冬生れの、スキーが大好きな少年が、雪の消える春と和解していくストーリーも組み込まれている。北欧に生活する子ども、子どもさながらの愛らしい自然への理解が、巧みに表現されているのである。

ところで、上州赤城で生れ育つた猪谷六合雄は、日本にスキーを初めて紹介したレルヒ中佐が、一九一一年に高田でスキーをしているが、それから間もなく、一九一四年にスキーを開始している。それまでは雪の中へ出るのが億劫でならなかったが、スキーで滑り出すと、雪の世界は急に樂園になったと書いている。そして猪谷は、「雪国の幼少年が喜んで雪の上へ勢揃いするような日が来たら、そのことだけでも大きな収穫だと思う」と、スキーの効用について書き留めている。ウツレは、まさしく、猪谷六合雄が夢に見た子どもなのである。

絵本の作者エルサ・ベスコフ（一八七四—一九五三）は、ノルウェー人を父に、フィンランド人を母に、スウェーデンに生まれている。家系から見ても北欧そのもののベスコフには、北欧の自然から芽生え、育まれた三十三冊の絵本がある。本書は、一九〇七年の作品であり、邦訳は一九八一年、小野寺百合子氏によってなされている。

エレン・ケイ、トーベ・ヤンソン、アストリッド・リンドグレーンの著作など、スウェーデン語から日本語への翻訳で名高い小野寺百合子氏には、第二次大戦の折、バルト三国やスウェーデンで武官夫人として生活した記録『バルト海のほとりにて』（共同通信社、一九八五年）の著書がある。そこには、スウェーデンで兵器用資材として、ピアノ線、ボール及びボールベアリングを購入し、日本へ輸送する為、まずドイツまで送り、ドイツからは潜水艦で日本へ送ったとある。さらには、東京の子どもへ向けとも届け物が許された為、荷物の中にエルサ・ベス



▲ウツレは、あたらしいスキーをはくと、おかあさんとおとうにいてきますと手をふって、広い野原をとおり、森の中にすべって行きました。

コフの絵本を入れて送ったとも書かれてある。

「子供たちはもちろん絵本の年齢ではなかったが、彼女〔エルサ・ベスコフ〕の絵本の底を流れる温かい母心が何とも好きで、せめて私の気持を子供たちに届けたいと思ったのである。戦後、帰国してからそのうちの二冊が私の手に戻った。何冊着かなかつたのだろうと思うと暗然とした」。戦闘が繰り広げられた海を越え、潜水艦が運んで届けた二冊のベスコフの絵本とは、さて何だったのであるうか。

ウツレの母親は、ウツレがスキーで森へ行ってもいいでしょうと許可を求めると、まず朝ごはんを食べさせ、それから厚いコートを着せ、スキー手袋をはめさせ、両方のポケットにサンドイッチをつめこみ、夕方までに帰る約束をさせる。そうして、飲み飲んで出かけるウツレを見送っている。小野寺百合子氏が語る「温かい母心」を、私はウツレの母親に殊更強く感じてならない。

ウツレが、はじめは疎ましく思っていた雪どけば

あさんの微笑を見て、思わず好きになるところも、

ウツレの人間愛が母性愛に包まれているからこそ培われてくる、温かさの通い方だと得心がゆくのである。ウツレは、世の母親なら、こう育ってほしいという理想の子ども像でもあるう。いや、ベスコフの描く絵本の子どもたちは、どの子もみな、現実的な子どもというより、純粋な子ども造型に近い。透明で、子どもそのものの理想的な結晶の輝きに満ちているのだ。ベスコフは、その輝きを追求したのであろうし、疑うことなく愛くるしい子どもを描き続けたことが、私には偉大であると思われるのだ。

(舞々同人)

ある日の育児日記から

(85)

佐藤 和代



先日、久し振りに会った友人に言われました。「『幼児の教育』読んでるけど、あの失業したダンナはどうなったの?」…はい、家におります。今のところ、データベース作りの下請けをしたり、ホームページの作成を請け負ったりと、在宅フリーターといったところ。主夫は休業中。そういう勤務体制(?)のため、近所を昼間歩くことが多くて、それも一年中Tシャツにジーンズ(夏は短パン)なので、「時々うさんくさい目で見られる」と本人は言います。このあいだはたまたま圭の友達が道ばたで泣いているのに出会

い、声をかけたのはいいけれど、何となく通り過ぎる人の視線が…。まあ、泣いている女の子と薄汚れた風体のおじさんという組み合わせでは、想像することはひとつ、だったりして。「塾に来たらまだ聞いてなかったみたいなんだよ。あとで先生がきてさ、『いや実は娘の友達で』なんて思わず言い訳してしまっただけ。でもこれが、有を連れていけると、たちまち「子どもと遊んでくれるうらやましいお父さん」という目に変わるらしい。住宅街では、昼間からふらふらしていても、子連れなら市民権があるのね。でも、有が「幼児」でいるのもあと少し。もう少ししな格好で歩いてもらおうかな。



仆が1人ふえました。圭は「うちにもほしい」…うう

編集後記

明けましておめでとうございます。今年もよろしく願っています。

今年は表紙絵を佐藤寛子先生にお願いしました。こんなふうに、子どもが三人で手をつないで楽しそうにしている光景をあまり見かけなくなりました。この絵を見ると、私も一緒に手をつないでいるように、うれしくなります。一年間、どうぞよろしく願っています。

*

お正月が近づいたわが家では毎日のようにコマをまわして遊びます。十個近くあるコマを裏返すとマジックで右から左へと矢印が書かれたも

のがあります。これはひもを巻く方向です。コマまわしを始めた当時、四歳児だったこの子たちのほとんどがまわせるようになったのは、先生が書いてくださったこの方向にひもを巻いてくださったからだと思います。このまわし方は一見、たよりなげです。内、外、内とコマを持った手を振った後の外への力で、コマは手から押し出され、だらりとひもから落ち、不思議にもまわり始めるのです。

多くの人はこの逆にひもを巻きまわす。私もその一人です。この方が、ひもを離すタイミングやスピードに快感があります。でも、非力な四歳児にはこれではまわせないので。毎年、子どもたちのまわし方をたよりなく思いながらも、一緒にコマまわしを楽しんでいます。(A)

幼児の教育

第九十七巻 第一号

(一九九八年一月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十年一月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒106東京都港区三田五―二―一

発売所 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一―四―九

☎〇三―五三九五―六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館に願っています。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

なんでも「手づくり」してしまう先生たちに贈る新シリーズ!!

手づくり保育シリーズ12

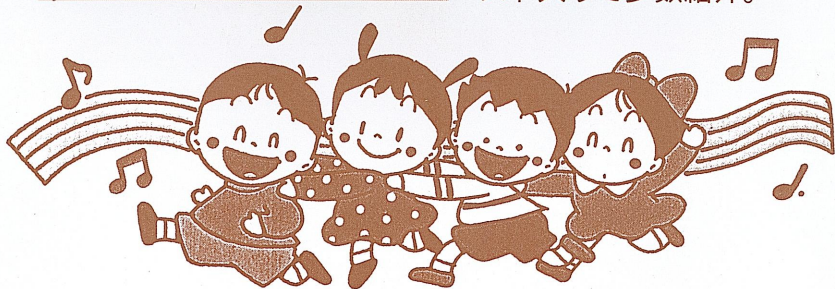
あそびうたオンパレード

三根政信・著

新刊



乳児から幼児まで、どこでも簡単にできる著者オリジナルのあそびうた集。うたうこと、動くこと、表現すること、人の思いを受けとめること、音楽すること、これがあそびうたです。遊びのバリエーションをイラスト入りで多数紹介。

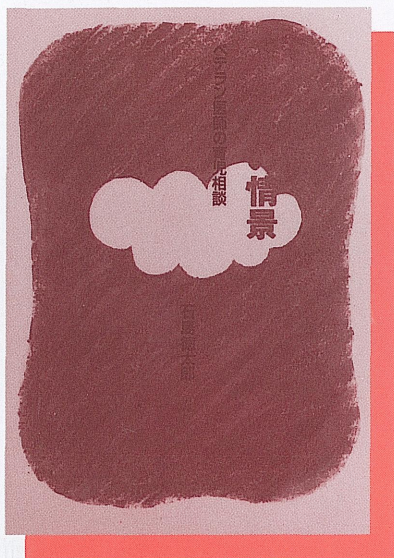


B5判・96頁・定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

子どもの世界が見えてくる
児童精神科医30年の育児相談を通して語る子どもの真の姿

そっと観る子どもの情景



親や大人は子どもの遊びの意味を取り違えがちです。真の子どもの内側の意味がわからないと、いろいろな問題を解決できません。こうした事例22話を取り上げ、育児相談30年のベテラン児童精神科医が子どもの問題を解明してくれます。

石島徳太郎・著

B6判・200頁・定価：本体1,800円+税

キンダーブックの
フレーベル館